

## 「(仮称)国際センター駅北地区複合施設 [音楽ホール+中心部震災メモリアル拠点]の整備」開催報告

### 1 本プログラムについて

仙台市では、音楽ホールと中心部震災メモリアル拠点の複合施設を青葉山エリアに整備する計画を進めています。この新しい文化施設の基本設計の中間案をご説明するとともに、今後設計や管理運営の検討を進めていくにあたって障害のある方、その活動の支援に取り組まれている方からの生の声を伺うため、本プログラムを開催しました。なお、本プログラムは、第8回障害のある人と芸術文化活動に関する大見本市「きいて、みて、して、見本市。」内の企画の一つとして実施しました。

[日時] 令和8年2月1日(日) 午後4時から午後5時15分

[場所] せんだいメディアテーク1階 オープンスクエア

[参加者数] 聴講者：約60名



大見本市会場全体の様子



プログラム会場全体の様子

## 2 ガイダンス

最初に本江正茂氏（東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻准教授／（仮称）国際センター駅北地区複合施設整備アドバイザー）より、ガイダンスを行いました。

[本江氏]

- 一年前、この企画で「仙台市がこういう建物を作ります。どんなものになったらいいと思うか、皆さんのいつも感じていること、期待していることを教えてください」という会を開催しました。
- その時のことを踏まえて、一年経って大体できました、というのが今日の話です。
- どんなものになったのか、これから説明してもらって、あの時に言ったことがちゃんと反映されているかとか、まだよくわからないところは、もう一回念押しで「ちゃんとしてくださいよ」ということとか、いろいろ思っていらっしゃることを教えていただければと思っています。
- まずはじめに、仙台市の方からどんなことをするのか、お話をしてもらって、その後に設計者からどんな案になっているのか、もう少し詳しく説明してもらいます。その後、具体的な質問と答えのやり取りを行います。単なる要望と回答にならないようにポジティブな対話ができればと思っています。



本江氏によるガイダンス

### 3 施設整備に関して

次に、仙台市青葉山エリア複合施設整備室長佐々木慎也より、本施設の概要を説明しました。

[佐々木]

- (仮称)国際センター駅北地区複合施設は、仙台市の文化芸術の総合拠点となる「音楽ホール」と、災害文化の創造拠点となる「中心部震災メモリアル拠点」を融合させ、一つの建物として整備を進めています。複合の施設を作ることから、仙台ならではの新たな価値を生み出す施設としたいと考えております。
- また、年齢や障害のあるなしに関わらず、誰でも気軽に訪れることができる施設にするために、皆さんからも幅広いご意見をお聞きしたいと思っています。
- 本市は、「楽都」として音楽活動が盛んに行われており、30年以上の長きにわたり、生音の響きに優れた2,000席規模の音楽ホールのご要望を多くの皆様からいただきました。
- 「劇都」の呼び名もあるとおり、音楽以外の文化芸術の活動も盛んです。東日本大震災後には、アーティストの皆様が復興のための活動に尽力され、文化芸術の持つ力が改めて認識されました。こうした経緯の中で、音楽ホール整備の機運が高まってきたところです。
- また、中心部震災メモリアル拠点は、災害に備えたり、災害を乗り越える力を文化として定着させ、発信していく「災害文化の創造拠点」となるものです。音楽ホールと中心部震災メモリアル拠点がバラバラに存在するのではなく、空間としても運営としても一体となることで、さまざまな交わりの中から、暮らしやまちを豊かで強靱にする新たな価値が生み出されます。そのような、仙台にしか成し得ない創造の拠点となることを目指しています。
- 本施設は、地下鉄東西線 国際センター駅の北側の敷地に整備を予定しています。
- この青葉山エリアには、自然・歴史・文化・学術など多様な資源があり、こどもたちの屋内遊び場の整備、大手門の復元などのプロジェクトも進行しています。
- これまで「基本構想」や「基本計画」をまとめており、今は、基本設計を進めている段階です。令和13年度の開館を目指しています。
- 文化芸術の事業としては、優れた舞台性能を持つ大ホールの特徴を活かし、市民とプロがともに参加する作品の創作・上演などを想定しています。また、こどもたちや障害のある方、高齢の方などあらゆる人に文化芸術の体験の機会を届けることを大きな柱にしたいと考えており、様々な形で鑑賞のバリアを取り払った公演や、体験型のワークショップ、施設の外に出向くアウトリーチ事業などを行っていきたいと考えています。
- 災害文化の事業では、災害に備え、災害を乗り越える意識やスキルを備えた人を増やすことの活動や、発信にも取り組んでまいります。そのために災害や復興にも関する知識を得たり、これから来る災害に備えて何が大事かを考えたりできる展示などに取り組んでまいります。
- さらに、この複合施設は、日常的には誰もが気軽に訪れ、それぞれの時間を過ごせるとともに、様々なイベントや交流の場ともなります。3月11日などの特別な日には、震

災の記憶を未来へつなぐプログラムを全館一体となって実施したいと考えています。

- この施設の整備費用としては、工事費で582億、設計や調査、備品購入などを合わせた全体整備費としては646億円を見込んでいます。引き続き、コストも意識して設計を進めるとともに、財源の確保にも取り組み、本市の財政運営の健全性を確保したうえで、整備を進めてまいります。
- 毎年の施設運営・事業展開によって、少なくとも約47億円の経済波及効果を見込むほか、様々な社会的価値を生み出してまいります。仙台の文化芸術環境を引き上げ、災害から立ち上がる力を育てることで、まちを豊かで強靱なものにしていくとともに、社会包摂（インクルージョン）を推進し、誰もが活躍できる社会の実現に貢献していきたいと考えています。

※ 詳細は「仙台市説明資料」のとおり



仙台市からの行政説明

#### 4 昨年のディスカッションの振り返りについて

続いて本江正茂氏より、昨年のディスカッションの振り返りを行っていただきました。

[本江氏]

- 整備費の高騰について、新聞やニュースでたくさん取り上げられています。それで構わないと思っている人は作っている方にも一人もいなくて、少しでも安くしなければならぬし、値段に見合う価値あるものにしないといけないと知恵を絞っています。
- 皆さんからの意見をちゃんと聞いて、作ってよかったなど皆さんに思って貰わないと本当に無駄になってしまうので、昨年に引き続き今年もこうした会を用意していただきました。
- 去年は、机を出してディスカッションを行いました。この時にテーブルごとにたくさん話をして、いろいろな意見を伺い、黒板にまとめました。その場では、複合施設に対する抽象的な要望や、トイレなどに関する具体的な意見などをいただきました。その時の記録は、仙台市のホームページに掲載しています。
- 我々も折に触れて見直して、忘れていないかを確認しながら進めてきているつもりです。具体的に一年経ってどのぐらい設計が進んだのか、あの時に伺ったことをどう折り込みながら設計を進めたのか、そのことについて設計者の藤本さんから説明をしていただきます。



本江氏より昨年のディスカッションの振り返り

## 5 基本設計(中間案)について

次に複合施設基本設計者の藤本壮介氏より、基本設計(中間案)について説明をしました。

[藤本氏]

- 設計コンセプトとして「たくさんの/ひとつの響き」という言葉を、プロポーザルの時から据えています。「たくさんの」という言葉は、「多様だ」というふうに言い換えてもいいかなと思うが、仙台は音楽や演劇がすごく盛んで、プロフェッショナルな方から一般市民の方まで、いろんな形で音楽をやられています。なので、ホールというと、プロが演奏して、それを聴きに行って、あんまり馴染みがない方はあまり関係ないのかなと思われる方もいると思いますが、実はそういう場所にはしたくないと考えています。もちろん最高の音響のホールをつくり、海外からもプロフェッショナルの方をお招きできるようにしたいと思っていますが、一方で同時にアマチュアの方々、あるいはこれから音楽やパフォーマンスを始めてみようかなという方々にも気軽に来ていただける場所にしたい。さらに言うと、それとはもう全く関係なく、本当に普段の日常の中で、今日みたいな日曜日に「どこ行こうかな」といった時に、「じゃあ、ちょっとあそこの施設に行ってみようよ」という風にご家族連れやカップルの方とかに思ってもらえるような場所にしたいと思っています。行ってみると、いろいろな出来事が起こっていて、あるいはぼーっと時間を過ごすことが出来たり、災害文化エリアを歩き回ってちょっとした発見があったり、ワークショップが行われていたり、サーカスのようなことが行われていたり、いろんなことが行われて、いろんな方々を受け止められる場所にしたい。それが「たくさんの」に込めた思いです。
- 一方で、施設内では同時にいろいろなことが起こります。これだけでも本当に素晴らしいことだが、時にはそれが一つにつながると、本当に尊い時間が生まれるんじゃないかと思っています。先ほどのサーカス(※この会の前に開催報告があった「フラットシアターフェスティバル」で行われたソーシャル・サーカスのこと)のように、演じる方と観る方が一緒になって何かをやる、あるいは3月11日のような大切な日に、それまでは多種多様な活動が行われていた場所でも一つの大きな演奏会が行われたりとか、そういう一つにつながる瞬間というものも同時に作りたい。なので、多様でばらばらなことが行われている素晴らしさと、それがつながる素晴らしさ。一見これは別々のことのように見えるかもしれませんが、それをこの施設では両方を実現したいと思っています。これが①の「多様な来館者を包摂する」ということです。
- ②の「活動の息づかいを感じさせる」。これも、先ほどお話ししたすごくフォーマルな場だけではなくて、日常のこどもも遊べるようなところをしたいと思っているため、お子様を連れのご家族連れが、休日に「とりあえずあそこ行っといたら、なんか1日時間が知らないうちに経ってたね」みたいな感じで過ごせる場所をイメージしています。でも、単に休日を過ごすだけではなくて、そこにちょっとした発見があったりするといいなと思っています。
- ③の「施設に求心力をもたらす」。これは地元の方に加えて、日本全国から、あるいは海外からもいらっしゃった方がここでつながることができれば、いろんな活動が広が

りますよね。そういう意図も飛び込んでいます。このたくさんの中の一つの響きというのを形にしていくにあたって、大ホール、小ホール、リハーサル室、練習室、ワークショップスタジオ、レストランとか、あと青色（※資料の平面図上の色）は災害文化のエリア。この建物に入っているいわゆる機能と名前がついたものがいっぱい並んでいます。それぞれがそれぞれの活動の場になりやすいように作っていきなさいと思いますけれども、まずはそれ以外にも、ここに名前がついている機能以外にも、さっき言ったなんとなくぼーっとしている場所とか、こどもたちが遊ばせられるような場所とか、読み聞かせができる場所とか、小さなワークショップが行われるロビー空間とか、そういうのもここにたくさんたくさん込めていこうと思っています。

- その諸室の真ん中に配置したロビー空間の吹き抜けを通じてつなげたいと思います。4階建ての建物になっていますが、1階だけではなく2階、3階、4階にいろんな機能が入っています。2階には災害文化の機能がたくさん入っており、3階は練習室がありますが、吹き抜けとなっていることで、これらの機能が立体的に全部つながるような場に行かないかと考えました。
- そして同時に、この吹き抜け空間で大切な演奏会や発表会をすることが出来ます。施設の真ん中や周り、いろんな階、いろんな所で演奏を聴いたり、あるいはいろんな場所にパフォーマーの方がいて、そこを巡り歩きながら全部を体験するような、そういうつながりを作るような場所として、大きな吹き抜け空間を作っています。たくさん響きのために、いろんな機能の名前がついている場所、あるいは名前がついていない場所、一つの響きのために、この吹き抜け空間を作っています。
- 吹き抜け空間は、真ん中がドーンと大きな空間になっていて、周りにたくさん床があります。床も、つながってはいますが、一見するとばらばらに見えるように作っています。それによって、いろんな場所から見下ろすことができ、いろんな活動がここで行われているのが一目で見えるようになっていきます。昨年までは、この床がいろんな高さになっていましたが、そこを行ったり来たりするのは大変なのではないか、というご意見をいただき、ほぼすべての床は同じ高さにするよう設計を修正しました。パース図上ではばらばらに見えるかもしれないが、実際は同じ高さになっていて、繋がっています。そのため、車いす利用者であったり、あとは高齢者の方々も含めて動きやすいように作っています。
- 1階交流イベントロビーはいろんな使い方をしてもらえようと考えています。まとめて一つの演奏会をすることもできるし、それぞれの床が災害文化の中でもそれぞれの展示室だったり、ワークショップスペースだったり、ちょっとした休憩スペースみたいなところも点在しています。上の階に移ると、クワイエットスペースがあり、なるべく少し静かなところで広瀬川、そして仙台市を望むような美しい風景を見られる場所を設けています。
- 施設構成については、ロビーが吹き抜け空間になっていて、そこにいろんな機能が顔を出すようなしつらえにしています。ちなみに、管理運営部門も、この吹き抜けになるべく近いところに置いています。というのは、この施設の運営をしている方々も、いつてみれば、ひとつつながりの共有、全体を共有するメンバーであるため、裏方という言葉は、

裏においておこうじゃなくて、表に来訪者の方々と一緒に過ごせるようなところに、オフィススペースを設けています。

- 外観について、いろんな花びらのような床が集まって建物ができています。その真ん中の吹き抜けに寄り集まる形で、この花びらがついているが、そのままそれが外観にも反映されています。特徴的なのは、建物が上にいくにしたがって、だんだん奥まっていくこと。そうすると外から見たときに、まっすぐの壁だと結構威圧感があると思いますが、だんだん上に行く床の方が奥まっていくので、比較的地面の上から、普通に地上を歩いているところから見たときには圧迫感がない、周囲に馴染むような作り方になっています。あと、建物全体がいろんな方向を向いていますので、「なんかいろんな活動がここに集まってきているんだな」というような印象の建物になるといいなと思っています。まさにたくさんの活動、たくさんの響きがあって、でもそれが集まっているので、たくさんの一つの響きというのが、建物を外観から見たときにも感じられるような設計になっています。
- 屋外にもイベント空間があって、あとはキッチンカーが来たりとか、そういう広場のスペースちょうど国際センター駅の間のスペースにしっかりと設けております。
- 交流イベントロビーエリアについて、天井が高いところもあれば低いところもあって、あと段々になっているところなんかは外に座っていただいてもいいですし、もちろん上の階に行くのにはエレベーターもしっかりと付いていますので、全体として完全なバリアフリーを実現しています。
- ひとつ前のプログラムで石塚先生（※東北福祉大学共生まちづくり学部 石塚裕子教授）のお話のあったトイレなんかはですね、大まかなゾーニングをつけていますが、細かなところはこれから、皆さんとやり取りをしながら進めていけるといいかなと考えています。もちろんトイレ以外のことも含めて。
- 2階の災害文化エリアは、かしこまった展示室だけではなくて、オープンなディスカッションとかワークショップとか、それから先ほどのようなサーカスのように、実際にものを作ってみて、いろんな体験をストーリーにしていったりとか、そういうようなことまでできるようなスペースになるといいなと考えています。
- 練習室は、小さいものから大きなものまであるが、これは一般の方々にも使っていたきたいと考えています。先ほどもお話ししましたように、一般の方々でも、すごく演奏をやられている方、アマチュアとプロの間ぐらいの方とか、あるいは楽器を始めてみよかなみたいな方でも、もちろんご利用いただきたいです。
- 4階はロビーのエリアで、そんなに広いスペースではないが、クワイエットスペースをはじめ、少し静かな場所を用意しています。
- 大ホールは、プロポーズの時は外に開いている絵があったが、その後、仙フィルさんといろんなお話をしたり、あるいは管理運営の観点から丁寧にご議論をさせていただく中で、しっかりと閉じた2,000席のホールを作っていくことにしました。
- いわゆる音楽ホールの時にはサラウンド型という、ステージを取り巻くような一体感と親密感と呼ばれるようなホールの作り、一方で演劇なんかをやる時には右側にありますようにプロセニウム劇場形式といって、その向こうに演劇の世界があってこちら

から見るという作り、まずベーシックなこれは両立できるようにしています。その上で演劇なんかは特に本当にいろんな形があり得ると思うため、可能な限りフレキシブルに作っていくことを意図しています。小ホールはいわゆる箱型のシューボックスの形でシンプルな作りなんですけれども、これも音楽だけではなくて、演劇でもですね、いろいろな、特に一般の方々、いわゆるプロ、大きな劇団じゃなくて、小劇団だったり、地元の劇団の方なんかも使っていただきやすいように、上にたくさんキャットウォークというところを作ったりしながら、フレキシブルに使える作りになっています。

- 昨年、この見本市でイベントをやらせていただいた時に、いろんなご意見をいただきました。それらに対してなるべく丁寧に対応していこうと思うのですけれども、ちょっとここ（ご意見を整理したスライド）で整理しました。これは全てではないですけれども、今のところ、こういうご意見があって、こういう対応をしていますというのを整理しています。
- 【エントランスに入った時に、災害と音楽の融合が分かると良い】大きなロビーに入ると、これはサイン計画とも関係してくるが、向こうが大ホールだな、斜め上が小ホールだな、上が災害文化だなということを、サインと空間の組み合わせによって視認性、全体のナビゲーションがわかりやすくしています。
- 【小さい子どもが自由に遊べる場所になると良い】各フロアに子どもが滞在しやすい場所を配置しています。これはすごく大切に思っていることで、公共施設は本当にいろんな方に開かれています。ホールっていうとなんとなく音楽会に行くんじゃないと行っちゃダメなのかなっていう印象があるかもしれないんですけども、そうではありません。まったくホールと関係なく、あそこの遊び場が楽しいからこの施設に行こう、あるいはあそこのレストランがおいしいから行こう、そこから面白いワークショップをやっているからちょっと行ってみようか、みたいな感じで、普段の生活の延長にこの建物がくるようにしたいと思っています。そのためには、子どもが遊んだり、あるいは子どもと一緒に滞在することが負担にならないように、そういう場所にしたいと考えています。
- 【迷わないような計画、場所にしてほしい】これはまさに真ん中に大きな吹き抜けがあるので、ほぼ全ての場所がその吹き抜けに面しています。なので、「あの小ホールどこにあるんですか」って聞いたら、「あそこです」ってダイレクトに指さすことができます。あるいはいろんなことが、イベントが行われているというのは部屋の名前じゃなくて、なんとかのワークショップどこだろうって見たら、あっちの方に何か立て看板があったり、真ん中に行くとなんか分かるという場所にしたいなと思っています。
- 【メンテナンスのしやすい施設計画にしてほしい】今回の建物、だんだん上に行くにしたがって奥まっていると説明しました。ガラス面とか壁面がそこについてきますが、どのガラスも壁も、その手前に屋根があったり、テラスがあります。そのため、クリーニングできないという建物ではありません。高所作業車や、大きなゴンドラという装置を出さなくても、クリーニングすることができます。
- 【観る側だけでなく演じる側のバリアフリーも必要】どうしても一般の方々がアクセスするパブリックエリアの話がどうしてもメインに聞こえてしまう部分もあるかと思

いますが、さっき言った裏方というか、演者側というか、地下に楽屋のスペースがあると言いましたけども、そのこのアクセスも含めて施設全体でバリアフリーを実現します。

- 【点字ブロックや触れる模型など、視覚障害のある方のための配慮】今後、実施設計というものが始まるため、その中でさらに具体的に検討していきます。先ほどもトイレのところで触れましたが、「こういうものに決まりましたよ」じゃなくて、これからやり取りをさらに丁寧に始めていきたいと考えています。
- 【パニックを起こしたときに逃げる先（緑のある場所など）があると良い】外観には屋根がいっぱいあって、少しずつ段々状になってましたよね。そのため外が常に近いところに見えます。周りを見ると、大体どうやって降りていけばいいかなってというのがわかるようになっていきます。この視認性がすごい大事だなと思っていて、外のテラスを見ていると、そこから階段で下に降りていけるようなルートもたくさん用意しています。法律で求められている避難階段とかは当然全部作っていくわけですけども、それでOKですよという話だけではなくて、心理的な安心感も含めた設計をしていきたいと思っています。
- 【ビジュアル的にかっこいいものもいいが、使いやすさとのバランスが大事】さっきのホールの話なんかもそうですが、実際トイレ、あるいはちょっとしたパブリックスペースも含めて、この先、皆さんとやり取りをさせていただきながら、より進めていきたいと思っています。昨年も、設計のワークショップというのを行いました。これは開館までですね、やっていきたいと思うけれども、そういう中でやりとりも含めて、皆さんの意見、それから専門家の意見を聞きながら、より進めていければなと思っています。
- ここからはソフト面に関してです。【安心できる場所、大きな災害があったとしても、戻ってこれる場所になってほしい】災害が起きた時のこの施設のあり方を、今後、市民の方々と交えた議論で深めていきます。もちろん建物の強度はしっかりと作って、災害が起こった後も大きなダメージがなくてすぐ再開できるということが、一つの安心感、市民の方々の「いや、あそこは、あそこは大丈夫だ」という安心感につながるということで、引き続き議論を深めていきたいと思っています。工事期間も含めて管理運営に関する議論の場を設けます。
- 【工事期間も含めて、管理運営に関する議論の場を設けたら良い】これは運営側にもバリアフリー、障害者も含めた方々をより広く入れて入っていただくことが大事なんじゃないかというご意見だと思いますけれども、いわゆるホールの専門性だけではなく、バリアフリーも含めたいろんな、子育てとかそういうところも含めて、広く運営の方々の体制が作られるといいかなと考えています。



藤本氏より基本設計（中間案）について説明

## 6 質疑応答・意見交換

続いて、会場の皆様よりご質問をいただき、仙台市および設計者から回答しました。

### 質問①

メディアテークですでに、「3がつ11にちをわすれないためにセンター」を設置していると思うが、その窓口と、今回新たに取り組むアーカイブ事業は同じものか？それとも異なるものか？

### 回答①（仙台市 震災メモリアル事業担当課長 佐藤陽子）

アーカイブに関して、メディアテークではご質問いただいた通り「わすれん！」という事業を行っております。「わすれん！」以外にも、本市では「SORA」という災害の記録を保存するアーカイブを作成して運用しております。それ以外にも、例えば東北大学や国会図書館であるとか、いろいろなところでアーカイブされておりますが、どのような情報が皆さんに役立って、どういうアーカイブにどういう情報が詰め込まれているかは知られていないところかと思っておりますので、複合施設では、様々なアーカイブが色々あるということ、またここに入っている資料を使って、こういうことができるよということを発信してまいりたいと考えております（例えば、こういう資料をダウンロードして、地域の対応力を上げるためにこういうワークショップをしたらいいのではないかというようなアドバイスができないかな、みたいなことを考えています）。

詳細はまだ決まっておりますが、このような使い方ができたら良いのにと感じていらっしゃる方のご意見もいろいろ伺いながら詳細を検討してまいります。

### 質問②

私は大学で音楽を担当する教員を行っておりますが、音楽ホールを作るときの「音楽」を、設計者の藤本さんや関係者の皆様はどのように捉えていらっしゃるのでしょうか？

というのは、お話を伺っていて、どうも音楽がそのホールの中で上演されるもの、という印象を少し受けました。例えば、遊び場を作るのも、仙台市内に遊び場が少ないからホールに作ろうとか、そういう発想ではなくて、そのホールで遊ぶことが音楽的な体験になる。その音楽っていうのも、ただ演奏するという次元ではなくて、聞こえてくる音や、見えてくる建築の構造のリズムとか、もっともっと身体的な体験だと思います。ですので、県のホールとも差別化が必要ですし、仙台がどのようなホールを作り、音楽をどう捉え、どう発信していきたいのかという非常に重要なコンセプトだと思うが、そのあたりを聞かせて欲しい。



回答②（藤本氏）

今のお話、ものすごく面白く、刺激的にお聞きしておりました。ホールそのもの、それからロビー空間も含めてですね、今お話しいただいた身体的に体感しながら演奏を超えた何か、単にお客さんとして聴くとか、単に音楽を演奏するというのを超えた音楽の場にしていくということは、ものすごく面白そうだなとお聞きしておりましたので、ぜひ盛り込んでいければと思っています。

回答②（仙台市 佐々木）

音楽ホールというところですが、仙台市には仙台フィルというプロのオーケストラがいっぱいいますので、そういったプロの素晴らしい演奏をしているホールというのも必要だというふうに考えております。また、仙台市と県が進めるホールの違いとしては、やはり市民の方にも参加していただいて、ホールでの演奏や演劇ですとか、市民の方が参加した中で素晴らしいものを届けるというような、そういう参加型の活動というものをやっていくということを念頭に置きながら、施設もそうですし事業の中身もそうなるように、整備を進めていきたいと考えております。

補足説明（本江氏）

ホールはもちろんあるけれども、練習室もたくさん備えておりますし、例えば工作工房という部屋には、マシンも置いてあるようなスペースがあって、小道具をみんなで作って、演奏して、聴くということが出来るような場所にしようとしています。だから映画館みたいな場所とはだいぶ違います。鑑賞するだけでなく作る場所という感じで、企画が作られると思います。災害文化の方も同じく、出来上がった展示を見せて、「忘れないようにしましょう。終わり」ではなくて、何をしたらいいのかをみんなで考えるための会議をするスペースだとか、展示そのものをみんなで作る、考える場所を作るとか、今の展示をみてどう思ったか共有するスペースとか、そういうものがいっぱいあるのが、県のホールとはちょっとキャラクターが違うところです。今までいろいろなところに震災の伝承施設がございますけれども、その中身をみんなで作ろうという風になっている施設はあまりない

と思うので、そうしたことをこの複合施設でやっていこうというのが特徴的かなと思います。

### 質問③

敏感な方が、あまり大きい場所に一緒にいられないような場合はあるので、そういう時にちょっと休めるようなセンサリールームのようなスペースがありますか。特に大ホールで。もう一点は、ここで災害があった時にはちゃんと逃げることができますか。停電した場合はエレベーターが止まる。その時に車いすの方もどうやって逃げることができるのでしょうか。



### 回答③（藤本氏）

最初の質問については、クワイエットルームというスペースは用意しているんですけども、それが大きさとか、数が十分かどうかというのは、引き続き皆さんとのやり取りを含めて検討しながら、最終的に詰めていきたいと思えます。

二点目の避難動線についてもですね、4階からスロープで全部降りてくるという動線はスペースの都合もあって、今のところは設計に盛り込んでいないので、避難用エレベーター等々を備える必要があるんですけども、そのあたりもおっしゃるように災害文化施設という、しかも仙台における災害文化施設ということで最も大事な部分になってくると思いますので、重要な検討課題とさせていただきます。しっかりと検討していきたいと思えます。

### 質問④

私は全く音を聴くことができません。私の周りを含め、先ほどからパニックが起きたときに逃げ場というお話ばかりなんですけれども、車いすというのも含め、こども用の車いす利用者とか、医療介護のような障害を持っている人たちが私の周りにたくさんいるんですが、コンサートやいろんなイベントに参加したくてもスペースがない。または、どのイ

ベントに行くにしても、前もって車いすの方はお申し出くださいとある。私は電話をすることができませんから、直前にけがをして車いすになったとか、ストレッチャーになった場合、前もっての申し込みをすることができないですよね。そういう方々にどういうスペースを検討されているのか教えてください。

また、青年文化センター（現：日立システムズホール仙台）でしたでしょうか。ガラス張りの個室がホールにあって、ケアが必要な方や、小さなお子様連れの親子などが利用していました。一般の座席ではなくて、そういった個室を利用して音楽イベントに参加したいという方がいらっしゃいます。多様性という部分で検討していただけると助かります。よろしく願いいたします。



#### 回答④（藤本氏）

現在、車いす用の席をホールの中に 24 席設けております。運用については、仙台市さんからご説明をいただきますけれども、なるべく障害がバリアにならないよう運用や空間の作り方をしていきたいと思っております。

もう一つは囲まれたスペースについてですね。これはやっぱりいろんな方、ご家族で子どもさんがいらっしゃる場合とかにご利用いただくための多目的室として 10 席分スペースを設けさせていただいております。それをオープンな形で運用できるように、市とも協議していければと思っております。

#### 回答④（仙台市）

車いすの方が前もってというところが、「確かにそうだな」ということを改めて感じたところでございます。運営についてはこれから深く検討を進めてまいりますので、今回いただいた内容のことも含めてですね、青年文化センターの運営者の方とも意見交換をしながら検討を進めてまいります。個室の運用についても、様々な形で皆さんに楽しんでいただくことが大切だと思いますので、今回のご意見を踏まえながら検討してまいります。ありがとうございます。

#### 質問⑤

藤本さんのこれまでの建築の業績も大変興味深く拝見しておりまして、開かれつつ閉じられる、そういった構造が今回の施設にもあるのだろうというふうに拝聴しております。

その中で敷地について疑念があるのですが、仙台の中心街は、歴史的に広瀬川の東側に形成されております。今回、あえて広瀬川の西側、しかも青葉山の入り口あたりに公共施設をつくる。その公共施設がふらっと立ち寄ってそこで緩やかに滞留していくような、そういうコンセプトを持った施設であるということは、どういった都市計画とかタウンプランニングのもとに成立しているのでしょうか。例えばせんだいメディアテークであるとか、あるいは勾当台公園でのイベントでは、買い物帰り等に立ち寄ることもできますが、青葉山であれば、恐らく少なからぬ人は地下鉄に乗って、国際センター駅までわざわざ移動して、複合施設に行くということになると思います。そのあたり、どういったコンセプトのもとに成立している計画なのかお聞かせいただければと思います。よろしくお願いいたします。



#### 回答⑤（藤本氏）

敷地の選定は、もともといろんなご議論があったとお聞きしております。街の中がいいのか、今の場所がいいのか、あるいはそれ以外の場所もあったと思うんですけども、最終的には今の国際センター駅すぐの場所になったわけです。それを受けて我々としては、確かに敷地の条件上は、ふらっと歩いていくにはちょっと遠いんだろうなと感じます。一方で駅と直結ですし、駐車場も相当数用意しておりますので、あそこに行ってみたいなという、まずは場所と建物、それから機能、あるいはそこでこんなことが行われているよ、こんなふうに過ごすことができるというイメージの伝え方も含めてですね、そういう場所にしていきたいなと思っています。もう一つは、なるべくいらっしゃった時に、まず開放的で広瀬川沿いの散歩道とも連動するようなつくり。それからそこで行われていることが魅力的で、もう一回行きたいなと、あるいは毎週行きたいなと思えるような場所づくりを

していきたいなど、それには先ほどの、例えばこどもさんに対するケアだったり、あるいはいろんな障害をお持ちの方を含めた、あらゆる方にしっかりと配慮して来場しやすい場所になっていることだったり、コンテンツが非常に豊かであるということだったり、あらゆることが関係してくると思うんですよね。なので、そこをしっかりとこれからさらにアップデートしていくことができればと思います。地下鉄を利用することも少しハードルが高いかもしれないんですけども、でもあそこに行きたいよねと皆さんに思ってもらえるような場所にしていきたいと思っています。

回答⑤（仙台市 佐々木）

本市では、仙台城の大手門の復元を進めていたりですとか、こどもの屋内あそび場、あと仙臺緑彩館など青葉山エリアの魅力向上につとめております。また、周辺には博物館や、宮城県美術館などがありますので、そういった施設とも様々なコンテンツをタイアップすることによって、複合施設だけではなくて、周りの施設を楽しみながら、エリア全体で過ごしていただけるようなことを考えながら整備を進めているところでございます。

質問⑥

私はろう者です。聴覚障害者に対して配慮する計画を教えてください。私は聞くことができないので、見てわかるような字幕や案内表示が欲しいです。また、ろう者が安心して交流できる居心地がいい場所（たとえば、柱や壁が少なく、見晴らしがよく広い空間等）の計画について教えてください。デフスペースに関しての情報はインターネットで発信されているので、参考にご覧ください。

もう一点。昨年11月に東京文化会館で「黙るな 動け 呼吸しろ」という舞台がありました。そのテーマが、ろう者が音楽を振動で感じて楽しむものだった。この施設でも同じようにろう者でも楽しめるようにしてほしい。また、舞台を鑑賞するときに、手話通訳が小さくて見えないことがある。手話通訳の映像もアップで観れるような形で、手話が見やすい、遠くからでも見やすいような工夫をしていただければと思います。



#### 回答⑥（藤本氏）

まず、交流イベントロビーについては、まだサイン、いわゆるここが何のスペースですよ、というのが描かれていないんですけども、そういうものをどんどん設置していきたいと思います。ですので、ここに立つと何の諸室がどこにあるかというのが非常に分かりやすく、皆さんに理解してもらえる計画にしていきたいと思っています。それはろうの方だけではなくて、一般の方々も入館されたときに、どこに何があって、どこに行けばいいのかというのが分かりやすいような作りしていきたいと思っています。これは実施設計というフェーズでアップデートしていきたいと思っています。

二番目のデフスペースといのは、ちょっと僕も知識がなくて、どういうものを指しているのかというのは、まだ理解が及ばないところがあるので、しっかり調べて、必要であればやり取りをさせていただいてですね、作っていければと思っています。あと、東京文化会館がパフォーマンスの中で、振動を使ったものがあつたと。それがこの場でも活用できないかと。それは具体的にどんな形で実現していけばいいのかというあたりは、ちょっとやり取りをさせていただいてですね、取り入れることができれば素晴らしいなと思いますので、ぜひそこもご意見をいただければと思います。

最後の手話が小さくて見えにくいという点については、オペレーションの工夫によって、手話通訳の方が見えやすいような何かっていうのをうまく開発していければなと思います。

耳の聞こえない方への配慮とか、それに向けた設計の進め方っていうのが、まだまだなんだなというところを今理解できましたので、しっかりと対応していきたいと思っています。

#### 質問⑦

私たち視覚障害者は、やはりバスや地下鉄、時にはタクシーを利用するので、なるべくイベントがあるときは、本数、台数を増やしてもらえると助かります。

#### 回答⑦（仙台市 佐々木）

2,000席の規模の公演ですと多くのお客様がいらっしゃいますので、そういったところも交通局と話をしながら、ぜひ検討していきたいと思っています。



#### 質問⑧

こういった会合でいろんな図とか出てきて説明をいただくのですが、やはり言葉によるものは限界がありますので、点図というんですけれども、線でわかるような図面とか、それからできれば完成予定の建物の立体模型とか、そういうものを置いていただくと、みんな来て、具体的なイメージを抱けて意見も出せるかと思っておりますので、ぜひお願いしたい。

また、視覚障害者向けの説明会みたいなものもあってもいいのかなと。そうすると、もう少し関心は高まるような気がします。



#### 回答⑧（藤本氏）

模型ですね。立体図面、あるいは模型みたいなものを我々の方で作ることができますので、そういうものをしっかり作って、皆さんによりご理解いただけるようにしたいと思

ます。

あとは、今日こういう場で非常に貴重な機会をいただいておりますけども、石塚先生のお話にもあったとおり、場が大きいとなかなか声をあげることも難しいこともあるかと思っておりますので、もう少し個別にですね、ご意見を伺う機会を作ることができればなと思っております。また、このすぐ目の前にサテライトオフィスもありますので、そういう場もちょっと活用させていただければと思います。

## 7 終わりに

(藤本氏)

今日は皆さん本当にありがとうございました。我々一生懸命やっておりますけれども、まだまだ至らぬところがたくさんあるなというのを今日実感しました。引き続きですね、個別でも、こういう場でもやり取りをさせていただきながら、本当に皆さんにこういう場所だといいなという風に思っていただけの施設にしたいと思っておりますので、どうぞ引き続きよろしく願いいたします。



(仙台市 佐々木)

本日はお越しいただきましてありがとうございました。今日は建物のところでいろんなお話もいただきましたし、あとは事業・運営の部分というところのお話をいただいたと思います。設計はどんどん進んでおりますけれども、運営の方も、まだまだこれから検討する部分が多くありますので、ご意見をいただきながら進めていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。



## 8 いただいたご意見の紹介

### (1) アンケート用紙に記載されたご意見

- ふれてわかる縮図、立体模型などの用意をお願いしたい。
- 障害種別ごとの説明会があってよいのでは。障害者団体との連携もすすめる。
- クワイエットスペースはキモだな！と思いました。
- 「創造」をいかに中心にすえられるか、その運営も大事だと思う。
- 各エリアでの活動の音、声が他のエリアの邪魔にならないか？吹き抜けを通じて干渉する可能性があることへの対策は？
- 私は 80 代なので完成時、生きているか疑問ですが国際センター駅は地下鉄東西線の駅なので、仙台駅東口から乗車して時々、ストレス解消に最高の場所なので、複合施設の完成を楽しみにしています。有難うございました。
- すべてにおいて 100%はありえませんが、本当に大変だと思います。完成楽しみにしております。建築への興味も持てました。本当にありがとうございます。お身体を大切にされ、完成までよろしく願いいたします。とても有益な日となりましたこと感謝しております。
- 当事者発信は大切と感じました。クワイエットルーム、トイレ、これからの話に多くのマイノリティの方が参加されますように。
- 今遠慮してしまっている人が出かけたくなる施設でありますように。
- 多くの方が関わって愛される施設になりますように。
- 個別×数かもしれませんね。サテライトオフィス、期待です。
- 管理運営を考え、地元まちづくり団体も連携した施設にしていきたい。
- 新県民会館との差別化、そして連携も考えて進めてください。
- 青葉山公園（追廻地区）、西公園と回遊できる工夫
- 地下鉄利用者へのメリットをつくってほしい。
- 災害時に避難所として使える設備や備蓄をしてほしい。避難計画や訓練には、障害のある人や外国人などのマイノリティの人を参加させてほしい。
- 「専門性の高いスタッフ」とは何についての専門性ですか？ソーシャルインクルージョン専門のスタッフを配置してほしいです。
- 特別な時間を過ごせる場、普段使いも出来る場、そしていろんな人の心を豊かにしてくれる施設になることを期待しています！
- 全体を見渡すことができる吹き抜け構造は良いと思いました。
- 部屋（練習部屋やワークショップスタジオ）など、メディアテーク 1 階のように廊下とつながる開放的な空間にすると楽しいかと思いました。
- 画面や光など、視覚的にわかるしくみがあると良いと思う。
- -ろう者（聴覚障害）の視点 -  
ロビー  
→アナウンスの音が聞こえないため、文字が流れてくる映像（手話動画も）をつけてほしい。  
憩いの場

→ “デフスペース”（柱や壁が少なく、見通しがいい）も考慮し、周囲を見渡せるような設計で情報を得やすくしてほしい。

#### 音楽ホール

→ ろう者でも音楽を楽しめるように、振動を感じられるようにしてほしい。

- 東京文化会館で昨年11月に開演された” 黙るな動け呼吸しろ” は、舞台のそばにある大きなスピーカーから100dB以上の音を流していた。離れた席からでも手話が見えるように映像をつけた方がいいかも。
- センサリールームとクワイエットスペースは別モノだと思います。センサリールームを使いたい当事者は、クワイエットできない状況になっている事が多いです。今後、両方のスペースの違いや特徴を市民の意見も取り入れながら、決めていけると良いと思います。
- 自分の知らないところで多くの方が、色々な支援をしてくれていることを知れてよかった。
- 目が見えない場合に、もう少しくわしい音声での説明があると尚よかった。
- クワイエットルームとセンサリールームは機能が違うので別々に考えること。
- 車イス席、磁気ループ席の分離配置（可動席になる応用も検討）
- 車イスの介助者席をセットで設けられていますか？
- 施設全体で各階にカームダウン、クールダウンルールを設けること。
- 利用動線の同一性はどこまで担保できているのか、整理しておく必要がある。
- 視覚障害、聴覚障害、知的障害の方の空間のわかりやすさ、誘導も今後、当事者に教えていただきたい。
- 目的がなくても立ち寄れる施設であればよいと思います。また、このようなワークショップに出たいと思いました。
- 主に運営面に関して話しあえる機会、場があってもよいかと思いました。
- 施設ができる前に既存の公共スペースに訪問したり、ソフト面をいかしあう（あえる）企画やアイデアを考えるなど。
- 後からも見やすいように文字を大きくしてほしい（宮交、市バス）。
- 話し合いがあったら、また、参加したい。話し合いの場があったら、ご案内ください。

#### (2) その他（WEB上で寄せられた意見等）

##### [40代（青葉区在住）]

- 練習室の利用料を安くしてほしい。
- 歩くところは幅広くしてほしい（白杖が当たる）。
- 音響の良いホールになることを願っている。

##### [50代（宮城野区在住）]

- 車いすユーザーの方の質問ででていた、センサリールーム（センサリーフレンドリールーム）と、回答で触れていたクワイエットスペースは用途や機能が違うので、しっかり世界基準で検証してほしい。
- 視覚障害の音楽家の方が意見で伝えていた、地下鉄やバスの利便性と、コンサート時における増便については、リアルで鋭い視点だった。この見本市に来るとき、この方

は、全盲のご夫妻でタクシーで来られており、かつタクシーを降りた歩道から smt 内の会場までは、ほんの数十メートルではあるが、通行人の方がボランティアで誘導してきた。さらに、帰路は、自宅最寄り行きのバス停のある電力ホール前バス停まで、わざわざ別のボランティアを調整し、smt から移動していた。このご夫婦は仙台でもまれなアクティブな方である。仙台市だけでも 2000 人いると言われている視覚障害の方たちに、様々な角度からアクセシビリティを実現してほしい。

- 「まほうの手」に参加する、ろうの女性が、意見を伝える場で東京文化会館の演目やアクセシビリティにふれていたが、仙台市で委嘱した東京文化会館や KIITO の専門家と仙台市民や設計者がともに学ぶ機会をつくってほしい。
- 宮城教育大学の音楽や美術の教員が発言したことで、ホールのあり方からもれおちている、音楽の捉え方や災害文化の議論の不足が明らかになった。また東北福祉大学の教員が障害当事者参加型のデザインプロセスを直前に発表したことで、本来あるべき市民とのワークショップの作り方にヒントを得られたと思う。今後の、専門家との連携にもっともっと、仙台の資源を使っていたきたい。

[70 代 (青葉区在住)]

- 視覚障害者支援に携わる者です。視覚障害当事者複数の方と参加しましたが、今後についてお願いがあります。視覚障害者のための会議資料が何も用意されておらず、非常に残念でした。点字版の資料、触る模型などがあればわかりやすく、意見を述べたり、お願いができたりしやすくなります。配慮に欠けていたと思います。今後、障害別の会議を予定しているとのことですが、是非とも、視覚障害者にとって必要な資料の準備をお願いいたします。

なお、点字資料は就労継続支援 B 型事業所「希望の星」で作成することができます。優先調達推進の観点からも、併せてよろしく願いいたします。